

V-3 松山平野の竪穴式住居址(I)

—平面形態変遷の予備考案—

梅木 謙一

はじめに

松山平野の竪穴式住居址の研究は、長井数秋氏が「愛媛県史 原始・古代I」で各時代を概観したほか、市内遺跡調査の報告書にて考察したものが幾つかある。いずれも、平面形態、主柱の配置と数量、高床部（ベッド状遺構）形態に着目し、その変遷が論ぜられている。ただし、その内容は概略的であり、個別具体的な追求に至らなかった。加えて、論は平野内の動態に限られ、西日本社会における当平野の住居諸形態の位置付けや評価をするに至らなかった。また、西日本の竪穴式住居址研究においても、当平野の住居址について論ぜられるることは少ない。この様な、当平野の竪穴式住居址研究の沈滯は、資料の稀薄さが最大の要因であった。今回の松山大学構内遺跡では16棟の住居址を検出しており、本例のように近年はその検出例も激増し、多くの竪穴式住居址資料を得ている。資料が増加した現在、松山平野の竪穴式住居址の再検討を行う時期に機しており、本論はその序の部分として、現時点における当平野の竪穴式住居址資料の収集と平面形態における若干の考察を行うものである。なお、本論では平面形態にのみ触れ、内部施設等については必要以上の論を避ける。

1. 松山平野の竪穴式住居

現時点における松山平野の竪穴式住居址検出数は、約260例である（註1）。このうち、弥生時代住居址は150例、古墳時代住居址は82例である（28棟は時期不明）。以下、時代ごとに概要を記述する。

弥生時代 150例の住居址中、平面形態が円形プラン（楕円・隅丸多角形状）を呈するものは62例、四角形（方形・長方形）プランを呈するものは78例、不定形及び形態不明のもの10例がある。

前期—確実な資料は1例で、文京遺跡4次調査の円形住居址があげられる（註2）。

中期—52例があり、円形プラン32例、四角形プラン16例、不定・不明4例である。前葉は不明である。中葉は、大峰ヶ台遺跡、祝谷六丁場遺跡で直径5mを越える円形プランが検出されており、さらに大峰ヶ台遺跡では短辺が1.7～3mの長方形プランものが検出されている。後葉は、平野内の各地で住居址が検出されており、円形プランものは直径5～7mのものが多い。四角形プランは長方形を呈しており長辺が5mを下るものが多く、例外として文京遺跡7次に3例（註3）、西野II遺跡に1例が6m以上となる。中期は、円形プランのものは規模が大きく、四角形（長方形）プランのものは規模が小さいものである傾向にある。こ

考 察

の大・小の関係が集落においてどの様に構成されるかは定かでない。

後期—78例があり、円形プラン22例、四角形プラン50例、不定・不明6例である。前葉は良好な資料に恵まれず、中葉以降の資料が多い。円形プランは6mを越えるものが大多数であるが、桑原高井遺跡、若草町遺跡(註4)等の末葉のものでは4m台のものがみられる。四角形プランは、1辺が3~5m台で隅丸方形プランが主流となる。この時期は、隅丸方形プランが急増し、円形プランは減少傾向にあり、円形プランは末葉には直径4m台と小型化する。

時期不明—19例があり、円形プラン7例、四角形プラン12例である。

古墳時代 82例の住居址中、円形プランは4例、四角形(方形・隅丸方形・長方形)プランは74例、不定・不明は4例である。

前期—19例があり、円形プラン2例、四角形プラン16例、不定・不明1例である。円形プランは、若草町遺跡、筋違C遺跡で検出されている。直径は4~6m台であり、小~中型住居である。

中期—21例があり、四角形プラン20例、不定・不明1例で、円形プランの検出例はない。四角形プランは、隅丸ないし方形プランを呈しており、1辺は3~5m台である。松山平野においては、この時期には円形プランが消失しており、四角形プラン(隅丸方形・方形)に完全に移行する。

後期—8例があり、方形ないし長方形プランのものである。1辺は3~5mである。

時期不明—34例があり、円形プラン2例、四角形プラン30例、不定・不明2例である。

2. 平面形態の変遷(表29参照)

弥生時代には円形プランが大型住居に、四角形プランが小型住居に採用される傾向がうかがえる。また、各形態の検出数をみると、(前)・中期は円形プランが主で、四角形プランは従であるが、後期になると円形プランの絶対数には変化はないが、四角形プラン特に隅丸方形プランが増加することで、円形プランと四角形プランの比率が逆転することが判る。

古墳時代になると、円形プランはやや規模を縮小し前期まで存在する。しかし、中期以降は、完全に四角形プランに移行する。四角形プランは、前期には隅丸方形プランの小型住居が多くみられ、中期以降は1辺が3~5m台、特に5m前後の方形プランが主流をしめる。後期は検出例が少ないが、長方形プランのものがみられることは注意を要することであろう。

3. 小 結

松山平野の竪穴式住居址は、弥生時代においては円形プラン・四角形プランが併存し、そこに規模の大小による規則制がみられる。古墳時代になると、前期まで少数ながら円形プランが残り、中期以降は四角形プランに完全に移行する。この住居形態の採用の変遷は、長井氏の論と大筋において同じくするものである。ただし、長井氏の論では円形住居址の発生を

松山平野の竪穴式住居址(1)

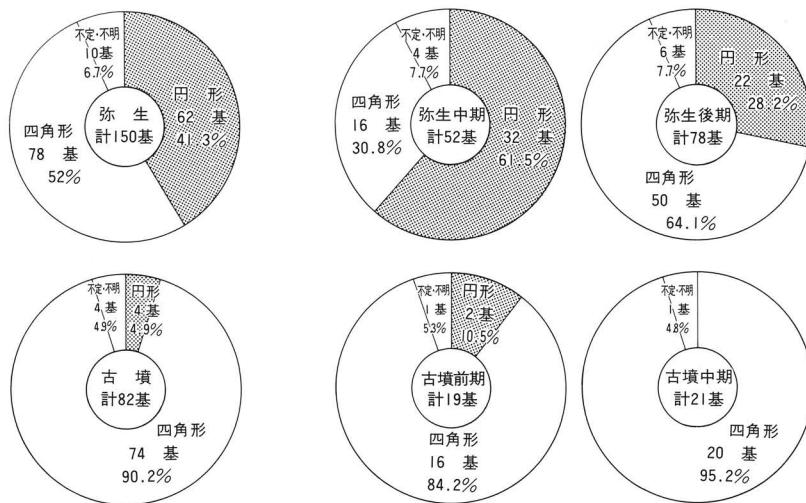


表29 松山平野の竪穴式住居址の平面形態

中期に求め、古墳時代の円形住居址の存在を明言していない。本論は、この点に関し長井氏の論を修正し、円形プランは弥生前期前半に既に出現し、古墳時代前期まで採用されることを新しく提唱するものである。

次に、円形プランの消失期を他地域と比較することにする。西日本では九州以外は弥生時代末まで円形プランが主流となる。北部九州は後期に既に完全に四角形プランに移行している。古墳時代になると、近畿も四角形プランに完全移行する。ただし、九州と近畿の中間地帯の中国地方は、古墳時代前期において、依然円形プランが一定の比率を占めている。そして中期になり四角形プランに完全移行する。松山平野の円形プランの動態は中国地方のものに同調するものである。このことは、円形プランの古墳時代前期における採用は中国地方だけの特色でなく九州と近畿の狭間にある地域の特色として考えられることができる可能性が高い。西日本の弥生時代末～古墳時代前期の社会構造解明の一資料として、重要なものとなるであろう。

本論では、竪穴式住居址の特に円形プランについて論じることになった。だが、松山平野の竪穴式住居址の平面形態変遷の傾向性やその特色（特徴）を一部であるが明らかにすることができたと考える。今後、資料の分析を進め、当平野の竪穴式住居址の様相を明らかにし、さらに弥生～古墳時代の当平野の西日本における歴史的位置付けや評価を行っていかなければならないと考える。

〔註〕

(1) 平成元年7月～平成二年3月に市内福音寺町で23,000m²の調査を松山市埋蔵文化財センターが実施した（福音小学校）。この際、弥生時代～古墳・古代・中世の集落関連遺構を検出した。竪穴式住居は弥生時代7

考 察

棟、古墳時代 114 棟を検出している。ただし、現在整理中で、数値に多少の変更があることより、本論では資料に数えなかった。また、現在整理中の他の遺跡のものも同様である。

(2) 久米窪田Ⅳ・V 遺跡に前期末～中期初頭の長方形を呈する竪穴状遺構がある。一部に当例を住居址として認定し論述したものがあるが、当遺構には不明確な点が多いことより、今回は資料として使用しなかった。

(3) 愛媛大学考古学研究室が1986年に調査。

(4) 松山市教育委員会が1988～89年に調査。

※ なお、本稿に使用した資料は、未報告資料が大多数を占める。このため、資料収集に際しては、調査担当者には、多大のご協力とご教示をいただいた。記して感謝するしだいである。

【参考資料】

石野 博信	1975	「考古学から見た古代日本の住居」『家』社会児想社
石野 博信	1975	「弥生・古墳時代住居の屋内区分施設」『檍原考古学研究所論集』 奈良県立檍原考古学研究所
栗田 茂敏	1987	「筋違C遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報I』松山市教育委員会
栗田 茂敏	1989	「大峰台遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
土居睦子・長井数秋	1979	「西野III遺跡」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書I』 愛媛県教育委員会
長井 数秋	1982	「農耕文化形成と発展」『愛媛県史 原始・古代I』愛媛県史編さん 委員会編
西尾 幸則	1989	「文京遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会編
宮崎 泰好	1989	「祝谷六丁場遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』 松山市教育委員会
森 光晴・大山正風	1976	『文京遺跡』松山市教育委員会
森 光晴	1981	「桑原高井遺跡」『松山市文化財調査年告書14』松山市教育委員会